

館山支部だより

Vol.132



『一足早く春を告げてくれる河津桜』
早い年は1月初旬に開花、今年は下旬になって
ようやく蕾がほこり始めました。
<写真は以前のもの、拙宅の庭先から>

まもなく如月(きさらぎ)を迎えますが、改めて新春の幕開けをお祝い申し上げます。巷間では株価乱高下、物価高騰が続く中衆議院の解散による選挙戦が慌ただしく展開されております。

海外ではウクライナ紛争、パレスチナ・イスラエル紛争の停戦に向けた交渉が続けられておりますがいまだ予断を許さぬ状況です。

令和8年が会員諸兄、ご家族皆様にとって幸せな年であります
ようお祈り申し上げます。

《館山支部長 川村 嶽》

『12・1月の活動実績』
1.9(金) 第21航空群司令年頭表敬
(海自OB関係四団体代表)
1.31(土) 1月支部役員会(コミセン)

支部の活動概要

『2・3月の活動予定』

3.14(土) 県隊友会理事役・後期支部長等会議(千葉)
3.20(金) 館山市戦没者慰靈祭式(鶴ヶ谷八幡宮)
3.28(土) 支部年度末役員会(コミセン)
<4.18(土) 令和8年度県隊友会通常総会・千葉市内>

令和7年度支部活動の総括に当って

毎年4/4半期は年度の支部活動を総括し、次年度の計画に反映する上で大切な時期であります。支部の活動を推進する上で、支部としての“体力”を維持するためにも“新陳代謝が欠かせぬ要件ですが、会員の高・老齢化に加えて新入会員の減少という、現代の日本社会が抱える問題をそのまま隊友会が抱えているのが現実です。

公益社団法人の旗を掲げる隊友会として、公益すなわち防災・社会貢献等に関わる活動抜きでは隊友会支部としての存在意義は無いと認識しております。支部の活動を計画する上で「会員の現状、支部の体力に見合った・相応した活動」を原則、基本とせざるを得ないのが現状ですが、状況によっては“多少の背伸び”もやむを得ないと考えております。

《支部長》

お知らせ 「自衛隊業務に関する求人情報」

『令和8年度予定求人について』

問合先: 支部事務局 メアド g_navy@outlook.jp

募集地域: 関東地域(東京都、千葉県ほか関東近県)

仕事内容: 各県所在の陸上自衛隊補給・支処における業務の支援(労務、付帯事務)

雇用条件: 採用時期(4月)、期間限定採用、給与制(社会保険付)

予め事前の求人情報登録が必要になりますので、関心のある方は早めに支部事務局宛問合せ下さい。

レクイエム

12/29 藤井 實会員 ご逝去(海、享年89歳)

1/16 斎藤紀一郎会員 ご逝去 (海、享年85歳)

隊友会館山支部会員として長年のご理解ご協力ありがとうございました。
ご冥福をお祈り申し上げます。合掌 <支部会員一同>

『支部連絡窓口』
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川村 嶽
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230

南鳥島近海はレアメタルの宝庫!

先月初め海洋研究開発機構の地球深部探査船が日本を出航しております。10年ほど前に南鳥島近海の海底の泥の中に高い濃度のレアメタルが分布していることが発見されましたが、今回の試みは探査船から6,000mの海底にパイプを降ろしてレアメタルを含んだ泥を採掘しようという実験のようです。本格的な採掘、事業化には莫大な経費、労力がかかるであろうことは必然ですが、あえてこの作業を加速させようという背景には、国策としてこの大事業を推し進めようという意図があるような気がするのです。レアメタルの埋蔵状況や用途等について少し頭の中を整理してみようと思います。

なぜレアメタルがこれほど騒がれるようになったのだろうか?

レアメタルは発光ダイオード(LED)、次世代型自動車(EV)のバッテリー、スマートフォンのバッテリーやタッチスクリーン、さらには航空宇宙機器のエンジンやスペースシャトルの構造材料として、その高寿命、高性能、耐熱性、省エネルギー等々、他の金属には代え難い原材料として広い分野で使われており、今後ますます需要が増え続けると言われております。なおレアメタルと言うのは特定の金属を指すものではなく、レアアース(希少希土類)を含めコバルト、リチウム、チタン等々無数の希少金属を総称してレアメタルと呼んでいることもあまり知られていないようです。

そしてレアメタルの埋蔵量については世界で中国大陸の一部の地域に偏在しております(7割近く)、産出量については実に9割以上を中国が占めていると言われます。これが原油の埋蔵・産出の問題と同様に“超弩級の戦略資源”として国際的な経済外交等の面での軋轢やさらには国の安全保障に関する問題にも波及しかねないと思うのです。高市総理の“存立危機事態”発言に端を発して、日本に対していろいろと難題を突き付け、嫌がらせをしている中国がどう日本に対するレアメタルの輸出停止という切り札を出してきましたね。

本格的な採掘・産出(事業化)の問題

調査によれば埋蔵量は世界一の中国に匹敵すると見られており、日本の国内需要の数百年分に相当すると言われ、しかも中国の場合と異なり泥の中の放射性物質が極端に少ないということです。さらにこの海域が日本の排他的経済水域という点で日本にとっては極めて明るい材料と言えましょう。とは言え開発のためには相当の開発努力と莫大な資金を必要とすることになると思いますが、これは空想、夢物語とか数十年先の話に非ず、日本にとって直面する死活問題と言ってもよいでしょう。中国が早速日本の深海レアアースの試験採掘について批判的なコメントを出してますが、今後、声明にとどまらず“現状変更”的の露骨な行動に出てくることも考えられます。今後産出のためには外国資本の導入ということが考えられますが日本の“主導権”を失うと言う最悪事態は断固として避けたいですね。

《海、匿名希望》

旧海軍の究極の兵器 “Z兵器”とは?

大戦末期のS19年末から始められたグアム島を本拠地とする米B29戦略爆撃機による高高度からの無差別爆撃が激化する一方、日本軍の対空砲撃も迎撃戦闘機も全く歯が立たずな術が無かった。起死回生の策として期待されたのが 海軍技術研究所が手掛けている“Z兵器”であった。簡単に言うと、高空を飛来するB-29に対して地上から強力なマイクロ波を照射してエンジンの燃焼を不調(爆発等)に至らせ墜落させることを意図したものであった。この研究の肝心な部分については、終戦時占領國軍に報告した「装備品等引き渡し目録」にも全く記載がなくその実態はほとんど知られていない。この度、旧軍のレーダーに関する調査を通じて交流のあったY氏(「電子会議」会員)から、Z兵器の調査に関する情報提供があったので概略紹介する。

※旧海軍、海自、技研のエレクトロニックス分野の勤務経験者で構成する団体

「Z兵器」の研究開発体制、研究のあらまし

S18年に入り静岡県の大井川沿いに海軍技術研究所島田分室が開設された。研究陣容に戦後ノーベル物理学賞受賞に輝いた湯川秀樹教授や朝永振一郎教授という超一流の物理学者を含む官民の研究者60名からなる科学者集団であり、研究助手等含め1,500名近い体制が整えられた。折りしもこの時期原爆の研究に見切りがつけられ、代って「Z兵器」の研究に拍車がかけられることになった。

S20.2に入り海軍の体制が大きく変わり島田分室は第二海軍技術廠島田実験所となった。島田実験所には直径10mの実験用の巨大なパラボラアンテナが建設され、電波の発射に必要な大電力は大井川水力発電所から供給する算段であった。空襲の激化に伴いS20.5~6にかけて被爆局の見地から疎開先として牛尾及び埼平実験所が設けられた。ただ埼平実験所については、終戦時建物の完全な解体とともに資料類もすべて焼却破棄され、前記の装備品引き渡し目録にも埼平実験所に関する記述は全く見られず研究そのものを秘匿する意図があったと考えられる。長い間“幻の実験所”と見られていた埼平実験所が最近の関係者等による遺構発掘調査により大井川の上流付近に構築物跡が確認されている。また長年の調査の中でマグネットロンの設計・製作根拠となったと考えられる詳細な資料も確認されており、今後の史実の解明が期待されている。紙面スペース関係でこれ以上の紹介については割愛する。

旧軍に関することについては、終戦時の文書類の焼却破棄もあり 概して正確な事実が伝えられていないことが多い。“殺人光線兵器”とか、館山の旧海軍の構築物いわゆる戦争遺跡を例にあげても “極秘の地下要塞(赤山地下壕のこと)”, “人間ロケット(桜花ターボジェット特攻機のこと)”等々、スリラーもどきの表現によりいたずらに人々の関心、興味をそそり、史実とはかけ離れた方向に人々の理解、認識を導くことになりかねない。

《自称館山地域史探索マニア その54》